これから大切になる教員の資質・能力とは何か？　「生徒の気づきと学び」を最大化するPJ第26回（2020/10/21）

対話の内容

多くの学校や教育委員会で、これからの社会で活躍するために生徒に身に着けてほしい資質・能力の議論が活発に行われています。

生徒に身に着けてほしい資質・能力が変わり、
1人1台端末、探究やSTEAMの学びなど新しい教育実践が増えるなか、
教員にはどのような資質・能力が新たに求められるのでしょうか。

「探究的な学びが広がるなか、どのように教員も変わっていくべきか？」
「どう学校組織として、資質・能力を育む体制を作っていくか？」
「生徒と教員の関係も変わっていくのではないか？」

上記のような問いをもとに、気づきの多い対話が行われました。

→

今回のキーワード

教えることを目的化しない

生徒が資質・能力を発揮する姿を具体的にイメージし、校内で共有できているかが重要。教員中心の教授や指導ではなく、生徒がコンピテンシーを身に着け、発揮するための手段としての学びのデザインを考える。

生徒を主語に語る

「教員が〇〇をした」「生徒に〇〇させる」ではなく、「生徒が〇〇した」を中心に学びをデザインしていく必要がある。重要なのは、生徒が実際にできるかどうかであり、教員の役割は生徒の気づきと学びを支えていくことである。

学校を中心としたエコシステムを創る教員

生徒を取り巻く家庭、学校、地域、企業等とともに学びをデザインする。自前主義にとらわれず、生徒の可能性を最大化していく。

- 話題提供　本PJメンバー　新潟市立葛塚中学校 上村慎吾 先生 –

・コロナ禍の4月に、現任校へ着任した。今振り返ると、そのような状況下でも、コンピテンシーを育む学びを創るために悩んだことが大事だった。
・目指すは生徒のWell-being、はぶらさなかった。そのために、「人と人との繋がり」を大切にして、新しい価値を生み出していくことにこだわった。
・校内研修や、教員向け通信はとても重要。職員の関わり合いを増やすことで、組織として目指す方向性が固まっていく。だから、例えば授業改善なども進む。
・学校のビジョンや目指したいゴールは常にビジュアル化した。それにより、地域のステークホルダー等の支援を頂く方々に、共感を持っていただけた。
・教員自身の価値観やビジョンが明確になるからこそ、ステークホルダーとの関係性の質が良くなり、具体的な取り組みが洗練されていく。

- 教員の声 –

・正解が無い問いに向き合うことが多くなる中、「答えが無いことをこだわらない」ことは重要な能力ではないか。（宮城）
・教員がこれから求められるのは“生徒のモチベーションを上げる”という役割ではないか。そこに必要な資質・能力を考えていきたい。（東京）
・学校を開く＝外部のパートナーを作っていける力は必要。閉じた学校では、デザインできる学びに限界がある。（岡山）
・どんな資質・能力を求め育んでいくか、学校として議論や研修するゆとりが必要。働き方改革もセットではないか。（福島）

「生徒の気づきと学び」を最大化するPJアーカイブはこちらから：https://berd.benesse.jp/publicity/

©生徒の気づきと学びを最大化するプロジェクト

「生徒の気づきと学びの最大化するプロジェクト」

これから大切になる教員の資質・能力とは？

～OECD ラーニングコンパス・エコシステムアプローチの視座から～

新潟市立葛塚中学校　上村慎吾

コロナ禍で直面した自分の課題～公立校で働く一人の教員の立場から～

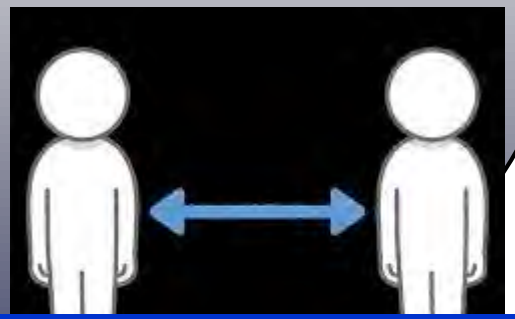
新型コロナウィルス
による影響
COVID 19 crisis

オンライン環境
が整わない現実

臨時休校

通常のカリキュラムを
展開できない現実

生徒，教員とともに達成感
を分かち合う経験が
できない状況



教育活動の制限
（かかわり合いの制限）

コロナ禍で生まれた問題意識

○　教員として、教育活動が制限される環境であっても、生徒が活躍できるカリキュラムをどのように展開すればいいか

○　生徒がどのような学びをし、どのような力を身に付けてほしいかという、教員として必要な目標は何か？

○　生徒、学校、地域にとってプラスになる取り組みをどのように展開すればいいか（様々な立場の人たちがよりよい関係を築く）

自分が大切だと考えているOECD ラーニング・コンパス2030（学びの羅針盤）
→生徒にとって必要な学びの方向性を示す

変革を起こす力のあるコンピテンシー
Transformative Competencies

共同エージェンシー
Co-Agency

新たな価値を創造する力
Creating New Value

Well-being
ウェルビーイング

対立やジレンマを克服する力
Reconciling tensions and dilemmas

責任ある行動をとる力
Taking Responsibility

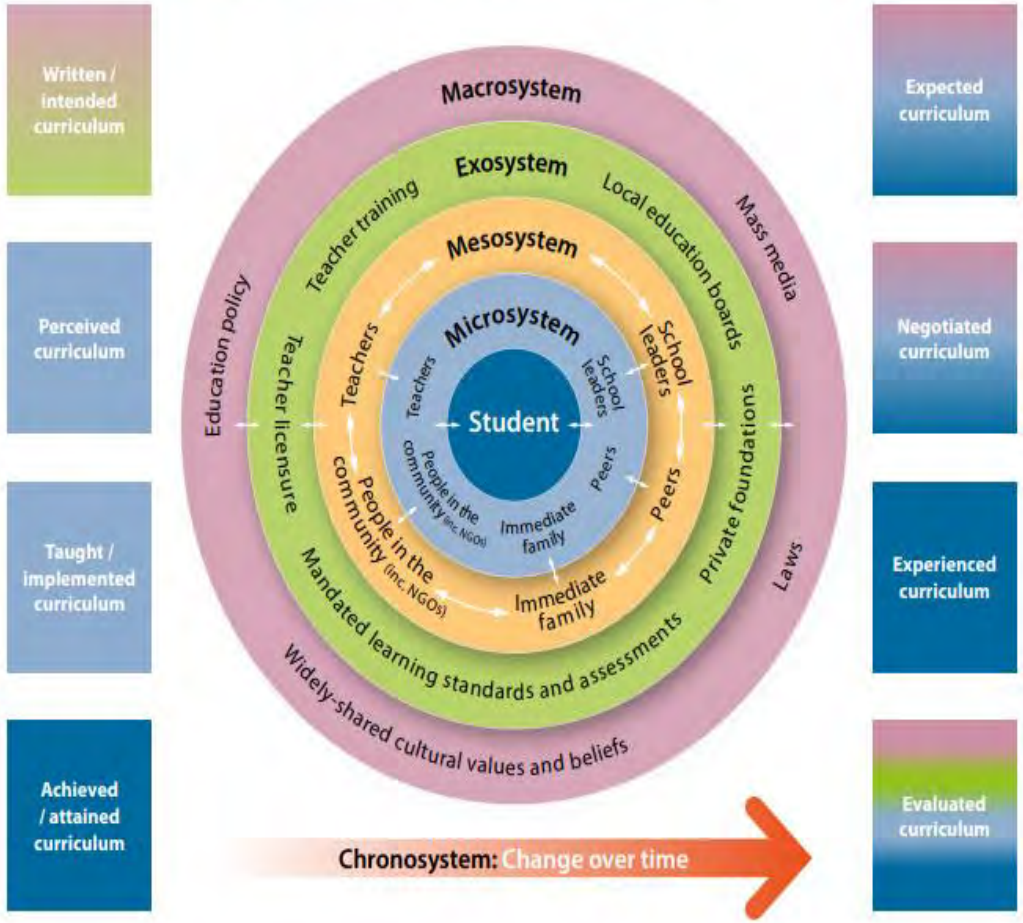
生徒エージェンシー
Student Agency

http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/から引用

自分が大切だと考えているエコシステムアプローチ
→様々なステークスホルダーがかかわるカリキュラムづくりへの方向性を示す

カリキュラムを振り返るためのエコシステムアプローチ

Figure 5. The Education 2030 ecosystem approach to curriculum analysis



下記のシステムを、どのように相互作用させ、活性化させるかが大切！

マイクロシステム（青の円部分） 主に通常の教室単位で行われ、生徒がどのように教員、仲間とのかかわりを高めていくかを示す。生徒がカリキュラムに参加するための活動や教材、評価、その他の活動なども含む。
メソシステム（オレンジの円部分） マイクロシステムに作用する。教員同士がどのようにしてお互いにつながるか、管理職が教員、家庭、コミュニティ(自治体、NGO団体なども含む)とのかかわりをどのように高めていくかを示す。
エグソシステム（緑の円部分） メソシステムに作用する。指導要領、学習評価、教員免許、教員研修、人事、予算がどのように教育活動に影響を与えているかを示す。
マクロ(紫の円部分） 生徒の環境に影響を与える社会的な考え、文化的な考えなどを示す。教育の目的、目標に関する考えも含まれる。

https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/brochure-thematic-reports-on-curriculum-redesign.pdfから引用

私が考える教員に必要な資質・能力

新たな価値を創造する力

価値＝人と人とのつながり

OECD ラーニング・コンパス2030とエコシステムアプローチを参考に、考えたつなぐ力の具体

〇葛塚地区のエコシステムのつながりを常に意識し、生徒が主役になるプロジェクト活動を立ち上げる
→生徒エージェンシーの育成とエコシステムの活性化

〇生徒とコミュニティの方々とのつながりを常に意識し、生徒がコミュニティの活動に参画し、自分たちの手でコミュニティをよりよくできた実感を促す
→生徒エージェンシーと変革を起こす力の関連

〇管理職の教育ビジョンをもとに、教員同士のかかわりを常に意識し、生徒の学びを支える学校づくりの推進
→教員間の共同エイジェンシーの活性化

新しく始めた挑戦　“つながりを創造する取り組み”

G-Suiteや学習アプリを活用したGIGAスクールの推進

コミュニティ・スクール指定校の推進
→かかわり合う力の向上

職員の「かかわり合う力」を高める職員研修の開催

自校の教育ビジョン重点「かかわり合う力」の向上の実現に向けた挑戦

新しい地域のまつりの創造

コロナの影響による祭り中止を、生徒がつなぎ止めるプロジェクト学習

生徒と地域の方が目指す学校像を語り合うコミュニティ協議会の実施

職員の「かかわり合う力」を高める職員研修の開催

職員の「かかわり合う力」を高める職員研修

つながりの創造のために

〇アウトプット型重視の研修スタイル
〇教育ビジョン「かかわり合う力」に特化したテーマを継続＝校長のビジョンと職員をつなぐ
〇毎回の研修で，グループを変える＝学年、教科、年齢層関係なく，様々な職員をつなぐ

職員と生徒の新しい関係を築くための「職員だより」発行

つながりの創造のために

○主語は生徒

「生徒は～し，…を発揮していました。」

×「～させた」「～してほしい」

○生徒のもっている力の高さを随時発信＝職員の生徒の見方を変える

生徒と地域の方が目指す学校像を語り合う
コミュニティ協議会の実施

生徒と地域の方が目指す学校像を語り合うコミュニティ協議会の実施

つながりの創造のために

〇子ども（小学生，中学生），ＰＴＡ，関係機関など立場関係なく，理想の葛塚コミュニティについて語り合う場の設定

〇中学生が議論の司会進行役を務め，コミュニティを動かす実感を高める

コミュニティスクールのゴールを共有する

つながりの創造のために

○文書よりも「視覚的な情報」で地域に発信

○地域コーディネーターからコミュニティ・スクールの取り組みを各自治体に発信してもらう

新しい地域のまつりの創造

灯籠プロジェクト

コロナによって中止となった216年続く祭りを途絶えさせず，生徒が次世代につなぐプロジェクト

葛塚中のグラウンドに生徒、葛塚まつり実行委員の皆様、各自治会の皆様、地域の皆様、保護者の皆様が集う

灯篭を全員で担ぎ、地域の方の笛・太鼓と共演しながら、「灯篭入舞」が行われ、全員が新たな葛塚まつり・葛輝祭の伝統・歴史を創造する

地域の方の力を借りる～足で稼ぐ～

つながりの創造のために

〇職員３名でチームをつくり，地域の方のところへ直接行き，灯籠づくりのハウツーを学ぶ

A主任＝職員間・地域のつなぎ役
B教諭＝生徒会・生徒のつなぎ役
私　　＝企画・運営役

〇地域の方と生徒が良い意味での「師弟」関係となり，地域の伝統が継承されていく関係を築く

実行委員と特別チームが動く

つながりの創造のために

〇実行委員生徒による全校生徒へプロジェクト参加の呼びかけや広報活動の推進

〇昼休み，放課後に特別チームの生徒が太鼓や笛の演奏をし，全校の雰囲気を盛り上げる

〇生徒がやりたいように，どんどんやってもらう

地域を変える場を創り出す

葛塚中の3年生が制作した灯籠が披露された体育祭＝新潟市北区

手作り灯籠 地域に活気

北区　葛塚中3年 体育祭で披露

新型ウイルス

新潟市北区で長年続く「葛塚まつり」の伝統を受け継ごうと、葛塚中の3年生がまつりの名物である灯籠を作り、同中の体育祭で披露した。今年のまつりは新型コロナウイルスの影響で中止となったが、子どもたちが再現。訪れた地域の人たちは、動物をモチーフにするなど、計4種類の灯籠を担ぐ生徒たちの生き生きとした姿を頼もしそうに見つめた。

葛塚まつりは毎年9月6～8日に開かれ、約260年の歴史がある。今年の中止を受け、伝統をつなごうと、3年生の一部約40人が地域の人の協力も得て、灯籠作りに挑戦。木材で骨組みを作るのに苦戦しながら

中止のまつり 伝統つなぐ

も、色合いを工夫するなどして、竜やライオンなど4種類の灯籠を約2カ月かけて完成させた。

12日の体育祭では、高さ約6㍍、重さ100㌔を超える灯籠を生徒15人ほどで担ぎ、笛や太鼓の演奏に合わせてグラウンドを練り歩いた。サポート役として地域の人も飛び入り参加し、「わっしょい」と元気に掛け声を上げる生徒たちをそばで見守った。

葛塚まつりで担ぎ手の世話人を務める同区葛塚の会社員西山強さん(48)は「今年はまつりが中止で残念だったが、中学校でできて良かった。灯籠は重くてつらいはずなのに、生徒たちは楽しそうに担いでいた」と褒めていた。

和風美人を題材にした灯籠を作った3年の大杉礼央さん(15)は「髪飾りなど細かな部分も妥協せずに作った。いろいろな人のおかげで完成することができ、地域の人にも喜んでもらえたのでうれしい」と満足そうだった。

つながりの創造のために

○体育祭当日に生徒とともに，地域の方に「生徒が創り出した新しい祭り」を披露する

○当日は，生徒のやりたいように行動できるようにする

○生徒が地域を変えた場面＝本物の舞台を演出する

９月２４日　新潟日報社朝刊

灯籠プロジェクトを通して見えてきたこと

【アンケート自由記述】
・みんな団結して創ることができる
・葛塚まつりの伝統をつなげることができる
・生徒と地域がかかわり合える
・自分の住んでいる地域に誇りをもち、将来自分が地域をリードするために大きな経験になる
・個性が輝ける機会になる
・笛・太鼓の演奏など得意なことを披露して共有し合える
・葛塚まつりがない中で灯籠を再現することで地域の人たちが喜ぶ
・色々な発想が生まれる
・葛塚のこれからに貢献できる
・実際に体験することで、大人の灯籠のすごさがわかる

3年生が灯籠を製作することで、葛塚まつりの伝統を継承することにつながったと思う。

肯定的評価　98%

灯籠プロジェクトは生徒の創造力を高めるために有効だと思う。

肯定的評価　96%

これから大切になる教員の資質・能力とは？

まとめ

４月のときと今の自分を比べると
変わったこと

自分がかかわる環境をいかに
よりよく変えるかを考え，
挑戦し続けること

OECD ラーニング・コンパス2030（学びの羅針盤）が、目指す生徒像の指針となったこと

変革を起こす力のあるコンピテンシー
Transformative Competencies

共同エージェンシー
Co-Agency

新たな価値を創造する力
Creating New Value

Well-being
ウェルビーイング

対立やジレンマを克服する力
Reconciling tensions and dilemmas

責任ある行動をとる力
Taking Responsibility

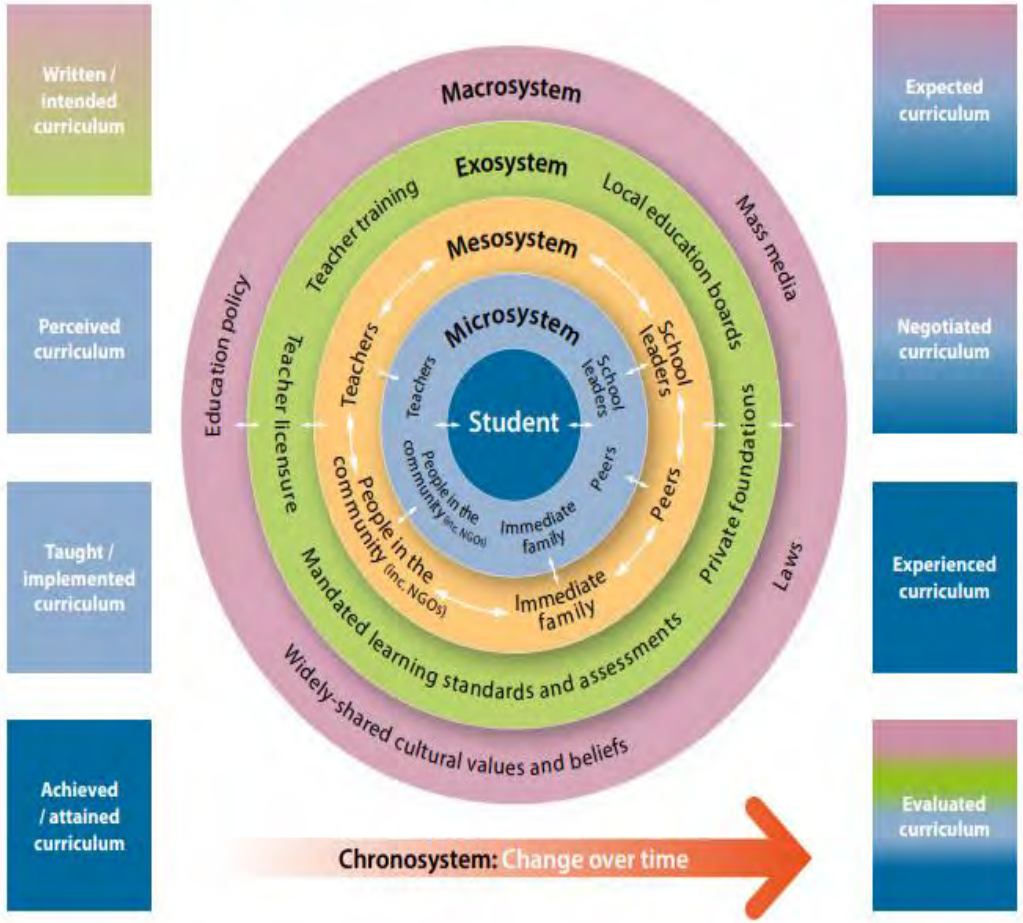
生徒エージェンシー
Student Agency

http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/から引用

生徒、学校、地域、教育機関などあらゆるステークスホルダーがつながるためのエコシステムアプローチがコミュニティスクールの事業にうまく適用できたこと

カリキュラムを振り返るためのエコシステムアプローチ

Figure 5. The Education 2030 ecosystem approach to curriculum analysis



下記の点を振り返ると、気付きと学びの最大化プロジェクトで話し合ってきた内容そのものであったこと

マイクロシステム（青の円部分）	葛塚中学校の生徒が目的意識をもって取り組めるコミュニティの活動とは何かを考える＝総合的な学習の時間
メソシステム（オレンジの円部分）	葛塚中学校の生徒とコミュニティのつながりをどのようにすれば活性化するかを考える＝葛塚まつり・灯籠プロジェクト
エグゾシステム（緑の円部分）	葛塚中学校の取り組みに対して、コミュニティの方々からどのように応援してもらえるかを考える＝外部連携
マクロ(紫の円部分)	新しい挑戦がどのような教育の理念に基づいているかを常に考える＝OECDラーニングコンパス、エコシステム

https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/brochure-thematic-reports-on-curriculum-redesign.pdfから引用

生徒の気付きと学びを最大化するプロジェクトで学んだこと

○先生方との対話を通して見つけた価値，学校ビジョン，教師と生徒の関係の在り方などが，自分の挑戦を動かすエネルギーになったこと
○その考えを大切に，自分がかかわるコミュニティの関係を変えたことで，エコシステムが出来上がっていたこと
○そして，最後に学校のカリキュラムが少しずつ好転したこと